



twei
twei
twei

再び御手間をかけさせてしまい申し訳ありません。けれど今彼に会うのは得策ではないと思うのです。

彼と私は、その関係を一步下がつて見つめ直すべき時期なのです。

※

碓シンジ様へ

私はなんという愚か者なのでしょう。

貴方に何を願い、何を望んであのような手紙を書いたのでしょうか。

貴方へ宛てておきながら、自分の感情を縷々として綴った、独りよがりの文となってしまいました。

手紙というものは、封をし、手元を離れて初めて、それが相手にとってどのような意味を持つものか、分かるのですね。

私は、先ほどの手紙のような事を書きたかったのではないのです。

異性としてではない愛を知らせたかったのです。

貴方のある部分を、私のある部分が憎んでいるのは確かなのです。

けれど、そうではないのです。

この憎しみも含めて愛と呼ぶべき感情を、私はどうすればいいのでしょうか。

私は過去に背負うものの大きな事を説明して、一体何をしようとしていたのでしょうか。

私は貴方のことを、理解できるなどと烏滸がましいことを言うつもりはなかったのです。

私には貴方のことなど一欠片も理解できないのです。

なぜなら貴方は私に説明してくださらないからです。

ですが、説明してくださったところで私は貴方を理解できるのでしょうか。

そもそも愛することに理解が必要でしょうか。

私は貴方を認め、貴方に認められようと努めているのです。

それだけなのです。

愛とは何かなぞ、私は知らないのです。

けれど私の感情が学者に言わせるところのそれならば、

私はこれをいくらでも貴方に注ぐ準備があるのです。

私は貴方の為に、死すら受け入れる準備があったのです。

むしろ、私が私であるうちに、貴方のその手に掛かって何もかも終わらせたかったのです。

しかし、私には貴方しかいないのに、貴方にとっての私は、他人という集合の中の一番都合の良い人間というだけのようですね。

私は悔しいのです。最後の最後まで貴方は私を見てくださらなかったのです。

ですが、それはもうどうでもいい事なのかも知れません。

私にとって貴方がかけがえの無い、という事以上に何を望むのでしょうか。

貴方にとって私がどうでもよいのなら、きっと私はどうでもいい人間なのでしょう。

私の善意に触れてほしいのです。それを通して、私を感じて欲しいのです。

確かに私の愛に触れたことを知らせて欲しいのです。

私は意地悪な女なのです。

私が死ぬ間際に、彼女は僕をこんなにも愛してくれたのか—と貴方を愕然とさせたいのです。
「あなたの傷は癒しにくく、あなたの打ち傷は痛んでいる。」
けれど、「愛は多くの罪を覆う」と私は信じているのです。
だから、私が死に、私の愛だけが残るのが一番良いようにも思うのです。

私は、私達には同じ弱いところ、欠けたところがあると申しました。
だからこそ、お互いに補完できると考えていたのです。

私たちは自分のことで両手が一杯で、お互い思いやることもできずに居ました。
今がその時なのです。貴方(あるいは貴方の優しさ)のせいで、私たちはまともに顔も合わせるこ
とができなくなってしまいました。
あの方が教えてくださった、一歩下がって全体を試してみる事、そして自分の内側を外側から見て
みる事をすべきなのです。

もし、お互いに認めることができたなら、私達はもう一度笑顔で会えると確信しているのです。

けれど、その時すでに私はこの世を去っていて、貴方は独り私の残された愛だけを支えに生きて
行くのです。

※

いいえ、こんな強がりほうざりです。
愛はこんなに清純なものではないのです。

私も貴方の優しさに触れたいのです。
お互い素直になるという事だけなのに、それさえも出来ない。

私は貴方のすべてを手にしたいのです。

私は夢を見ました。

——— 私は深いところで、自分が生きていたことに気付き目を開けるのです。...

ゆっくり立ち上がって、辺りを見回します。

私の目の前に大きな鏡があり、私と周りの風景をすっかり映しています。

すると、もう一枚鏡があることに気がきます。

もう一枚、もう一枚。

気付くと全部で九枚の鏡が私を取り囲んでいます。

そのうちに、鏡は消え、そのなかに映っていた私だけがその場所にとり残されています。

自分のウツシに囲まれ私は、自我を疑い苦悶するのです。

少し離れたところで、貴方は膝を抱えて私を見ているのです。———

私は不安なのです。助けてくださいと叫びたいのです。
私は自らの殻に閉じこもるあまり、殻を破る勇気を失ってしまったのです。
貴方は私の殻を破って、手を差し伸べてくれますか。

期待はしていません。

今になって貴方が手を差し伸べるようなことがあってはならないのです。
貴方の優しさは結果的に私を傷付けるだけなのです。
貴方が私に触れるほど、貴方の心が私には向いていないことが分かるのが、たまらなく辛いのです。

それでも、いいえ、期待はしていません。